

中小企業支援研究の今後について 思うこと

千葉商科大学 総合研究センター長 副学長 基盤教育機構長

寺野 隆雄



千葉商科大学では、2023年4月より、これまでの研究所体制を見直し、新たに、経済研究所・会計教育研究所・サステナビリティ研究所・遠藤隆吉研究所の4つの研究所から構成される総合研究センターを立ち上げることになりました。私は、この新しい研究センターを取りまとめる任についた関係で、本誌で一言申し上げることになった次第です。

私の専門は、システム工学・人工知能といった情報系の領域なのですが、サービスやマーケティングにかかわることも多く、しばしば、さまざまな中小企業の業態を調査してきました。たとえば、だいぶ昔になりますが、諏訪岡谷地域の板金加工企業を訪問したときに、ステンレス製の折り鶴が飾ってあって驚いたことがあります。どうやって作ったのか見当もつかない…

ところで、本年度は、千葉興業銀行のご協力により地域金融の現在と未来に関する特別講義を担当させていただきました。これまでの金融業を著しく発展させた最近のビジネスの状況を、現場の担当者を中心に講演いただき、受講生も目から鱗の状況でした。そんな中で、ゲストとして講演いただいた2社の取り組みを紹介したいと思います。

ひとつめの事例はガラスリソーシング株式会社です。この会社はガラスやペットボトルなどの使用済み品を「廃資源」として再利用することを目的に最先端の工場をお持ちで、SDGsへの取り組みを通じて環境社会に順応していくために様々な研究・調査等を重ねておられます。そして、静脈産業のパイオニアとして革新的な製品、開発、システムを実現化されています。製品は、ふたたび容器などに再利用されるほか、対応できぬ廃品は地盤改良用砂として利用されます。また、これらの業務を通じて得られた知見を地域の環境対策や災害対策に活かしておられます。

ふたつめの事例は、株式会社常盤植物化学研究所です。この会社は、「植物化学」の専門企業として、植物成分の抽出・分離・精製に関する幅広いノウハウを生かし、医薬品をはじめ化粧品・健康食品・食品添加物の分野で、BtoB、BtoCのさまざまな事業を展開されています。特に、ESG経営の実践を心がけておられ、これによって高い利益率が達成できることを実証しようとおっしゃっていました。また、この会社は経済産業省が選定する「地域未来牽引企業」として、地域経済の中心的な担い手となっています。

2社のトップの講演を聴いた受講生たちは、このような企業によって我が国のSDGsへの取り組みやESG経営の実践が先導されていることを初めて実感したようでした。このように、積極的に環境問題に取り組む元気な中小企業は存在します。

しかし、大部分の中小企業の実態は、学生を含む一般の方々には知られていません。一方、中小企業の当事者のほうでも自分たちの技術や経営がどのようなレベルにあるかを認識していないことが多いです。ここに、我々が実学に直結する中小企業研究を推進する価値があります。それには、いつその産学連携が不可欠であると考えます。幸いなことに千葉商科大学の卒業生には、1,000社以上と非常に多くの中小企業トップがいらっしゃいます。まず、本学に関連する中小企業調査のアーカイブを作ることから始めませんか？ 実際、中公新書から「日本の中小企業」を出版された関満博氏は、1,000社を超える中小企業を訪問され、工場を見ると即座にアドバイスされるのを常としていました。

総合研究センターの関係者の方々には、さまざまな分野の専門家がいらっしゃいます。経営・経済はもちろんのこと、歴史や哲学、あるいはICTに至るまで、これらのノウハウを総合して、新しい中小企業支援研究を続けていけたらと考えています。